

溺れかけた兄妹

有島武郎

青空文庫

土用波どようなみという高い波が風もないのに海岸に打寄うちよせる頃ころになる

と、海水浴きに来ている都みやこの人たちも段々別荘をしめて帰ってゆくようになります。今までは海岸の砂の上にも水の中にも、朝から晩まで、沢山の人が集って来て、砂山からでも見ていると、あんなに大勢な人間が一たい何所どこから出て来たのだろうと不思議に思えるほどですが、九月にはいつてから三日目になるその日には、見わたすかぎり砂浜の何所にも人つ子一人いませんでした。

わたし私の友達わたしのMと私と妹とはお名残だといつて海水浴にゆくことにしました。お婆ばあさま様が波が荒くなつて来るから行ゆかない方がよおっしやくはないかと仰有おっしやったのですけれども、こんなにお天気はいい

し、風はなしするから大丈夫だといって仰有ることを聞かずに出かけました。

丁度昼少し過ぎで、上天気で、空には雲一つありませんでした。昼間でも草の中にはもう虫の音がねしていましたが、それでも砂は熱くつて、裸足だはだしと時々草の上に駈かけ上あがらなければいけないほどでした。Mはタオルを頭からかぶつてどんどん飛んで行きました。私は麦稈むぎわら帽子ぼうしを被かぶった妹の手を引いてあとから駈かけました。少しでも早く海の中につかりたいので三人は氣息いきを切つて急いだのです。

紆うねり波なみといえますね、その波がうっていました。ちやぷりちやぷりと小さな波なみが波打際うちぎわでくだけるのではなく、少し沖の方に細

長い小山のような波が出来て、それが陸の方を向いて段々押寄せ
て来ると、やがてその小山のてっぺんが尖つて来て、ざぶりと大
きな音をたてて一度に崩れかかるのです。そうすると暫らく間を
おいてまたあとの波が小山のように打寄せて来ます。そして崩れ
た波はひどい勢いで砂の上に這い上つて、そこから中を白い泡で敷
きつめたようにしてしまふのです。三人はそうした波の様子を見
ると少し気味悪くも思いました。けれども折角そこまで来てい
ながら、そのまま引返すのはどうしてもいやでした。で、妹に
帽子を脱がせて、それを砂の上に仰向けにおいて、衣物やタオル
をその中に丸めこむと私たち三人は手をつなぎ合せて水の中には
いつてゆきました。

「ひきがしどいね」

とMがいました。本当にその通りでした。ひきとは水が沖の方に退ひいて行く時の力のことです。それがその日は大変強いように私たちは思ったのです。踝くるぶしくらいまでより水の来ない所に立っ
ていても、その水が退いてゆく時にはまるで急な河の流れのよう
で、足の下の砂がどんどん掘れるものですから、うっかりしてい
ると倒れそうになる位でした。その水の沖の方に動くのを見てい
ると眼めがふらふらしました。けれどもそれが私たちには面白くつ
てならなかったのです。足の裏をくすむるように砂が掘れて足が
どんどん深く埋うずまってゆくのがこの上なく面白かったです。三
人は手をつないだまま少しずつ深い方はいってゆきました。沖

の方を向いて立っていると、^{ひげ}膝の所で足がくの字に曲りそうになります。陸の方を向いていると、^{むこう}向脛にあたる水が痛い位でした。両足を揃えて^{そろ}真直に立っただまもどちにも倒れないのを勝^{かち}にして見たり、片足で立ちっこをして見たりして、三人は面白がって人魚のように跳ね廻りました。

その中にMが^{うち}膝位の深さの所まで行つて見ました。そうすると^{うねり}紆波が来る度ごとにMは^せ脊延びをしなければならぬほどでした。それがまた面白そうなので私たちも段々^{ふかみ}深味に進んでゆきました。そして私たちはとうとう波のない時には腰位まで水にかかるほどの深味に出してしまいました。そこまで行くと波が来たらただ立っていたままでは^{おっつ}追付きません。どうしてもふわりと浮き

上^{あが}らなければ水を吞^のませられてしまうのです。

ふわりと浮^{うきあが}上ると私たちは大変高い所に来たように思いました。

波が行つてしまふので地面に足をつけると海岸の方を見ても海岸は見えずに波の脊中だけが見えるのでした。その中にその波がぎぶんとくだけます。波打際^{なみうちぎわ}が一面^{めん}に白くなつて、いきなり

砂山や妹の帽子などが手に取るように見えます。それがまたこの上なく面白かつたのです。私たち三人は土用波^{どようなみ}があぶないということも何も忘れてしまつて波越^{なみこ}しの遊びを続けさまにやつていました。

「あら大きな波が来てよ」

と沖の方を見ていた妹が少し怖^{こわ}そうな声でこういきなりいまま

したので、私たちも思わずその方を見ると、妹の言葉通りに、これまでのとはかけはなれて大きな波が、両手をひろげるような恰つこう好で押寄せて来るのでした。泳ぎの上手なMも少し気味悪そうに陸の方を向いていくらかでも浅い所まで遁にげようとした位でした。私たちはいうまでもありません。腰から上をのめるように前に出して、両手をまたその前に突出つきだして泳ぐような恰好をしながら歩こうとしたのですが、何しろひきがひどいので、足を上げることも前にやることも思うようには出来ません。私たちはまるで夢の中で怖い奴やつに追いかけられている時のような気がしました。
後うしろから押寄せて来る波は私たちが浅い所まで行くゆのを待っていないてはくれません。見る見る大きく近くなって来て、そのてっぺん

にはちらりちらりと白い泡がくだけ始めました。Mは後から大声をあげて、

「そんなにそつちへ行くと駄目だよ、波がくだけると捲きこまれるよ。今の中に波を越す方がいいよ」

といいました。そういわれればそうです。私と妹とは立止つて仕方なく波の来るのを待っていました。高い波が屏風を立てつらねたように押寄せて来ました。私たち三人は丁度具合よくくだけない中に波の脊を越すことが出来ました。私たちは体をもまれるように感じながらもうまくその大波をやりすごすことだけは出来たのです。三人はようやく安心して泳ぎながら顔を見合せてにこにこしました。そして波が行ってしまおうと三人ながら泳ぎ

をやめてもとのように底の砂の上に立とうとしました。

ところがどうでしょう、私たちは泳ぎをやめると一しよに、三人ながらずぼりと水の中に潜くぐってしまいました。水の中に潜つても足は砂にはつかないのです。私たちは驚きました。慌あわてました。そして一生懸命にめんかきをして、ようやく水の上に顔だけ出すことが出来ました。その時私たち三人が互たがいに見合せた眼といったら、顔といったらありません。顔は真ま青つさおでした。眼は飛び出したそうに見開いていました。今の波一つでどこか深い所に流されたのだということ私たちがいい合わさないでも知ることが出来たのです。いい合わさないでも私たちは陸の方を眼がけて泳げるだけ泳がなければならぬということがわかったのです。

三人は黙ったままで体を横にして泳ぎはじめました。けれども私たちにどれほどの力があつたかを考えて見て下さい。Mは十四でした。私は十三でした。妹は十一でした。Mは毎年まいねん学校の水泳部に行つていたので、とにかくあたり前に泳ぐことを知つていました。私は横のし泳ぎを少しと、水の上に仰向けあおもむに浮くことを覚えてばかりですし、妹はようやく板を離れて二、三間げん泳ぐことが出来るだけなのです。

ごらん御覧なさい私たちは見る見る沖の方へ沖の方へと流されているのです。私は頭を半分水の中につけて横のしでおよぎながら時々頭を上げて見ると、その度ごとに妹は沖の方へと私から離れてゆき、友達のMはまた岸の方へと私から離れて行って、暫しばらくの後のち

には三人はようやく声がとどく位ぐらいたがいお互がいに離ればなれになってしまいました。そして波が来るたんびに私は妹を見失ったりMを見失ったりしました。私の顔が見えると妹は後うしろの方からあらん限りの声をしぼって

「兄さん来てよ……もう沈む……苦しい」

と呼びかけるのです。実際妹は鼻の所ところぐらい位まで水に沈みながら声を出そうとするのですから、その度ごとに水を呑むのと見えて真まつさお蒼さおな苦しそうな顔をして私を睨にらみつけるように見えます。私も前に泳ぎながら心は後うしろにばかり引かれました。幾度いくども妹のいる方へ泳いで行いこうかと思いましたが。けれども私は悪い人間だったと見えて、こうなると自分の命が助かりたかつたのです。妹の所

へ行けば、二人とも一緒に沖に流されて命がないのは知れ切つて
いました。私はそれが恐ろしかったのです。何しろ早く岸につい
て漁夫りようしにでも助けに行つてもらおう外ほかはないと思ひました。今か
ら思うとそれはずるい考えだつたようです。

でもとにかくそう思うと私はもう後うしろも向かずに無我夢中で岸の
方を向いて泳ぎ出しました。力が無くなりそうになると仰向あおむけに水
の上に臥ねて暫しばらく氣息いきをつきました。それでも岸は少し近づ
いて来るようでした。一生懸命に……一生懸命に……、そして立た
ちおよ泳ぎのようになつて足を砂につけて見ようとしたら、またずぶ
りと頭まで潜くぐつてしまいました。私は慌あわてました。そしてまた一
生懸命で泳ぎ出しました。

立つて見たら水が膝ひざの所位しかない所まで泳いで来ていたのはそれからよほどたつてのことでした。ほつと安心したと思うと、もう夢中で私は泣な声こゑを立てながら、

「助けてくれえ」

といって砂浜を氣狂きちがいのように駈かけずり廻まわりました。見るとMは遥はるかむこうの方で私と同じようなことをしています。私は駈かけずりまわりながらも妹の方を見ることを忘れはしませんでした。波打際から随分遠い所に、波に隠れたり現われたりして、可哀かあいそうな妹の頭だけが見えていました。

浜には船もいません、漁りようし夫もいません。その時になって私はまた水の中に飛び込んで行きたいような心持ちになりました。大

事な妹を置きっぱなしにして来たのがたまたまなく悲しくなりました。

その時Mが遙かむこうから一人の若い男の袖そでを引ひぱってこつちに走って来ました。私はそれを見ると何もかも忘れてそっちの方に駆け出しました。若い男というのは、土地の者ではありませんよ。うが、漁夫とも見えないような通りがかりの人で、肩になに何か担かつていました。

「早く……早く行って助けて下さい……あすこだ、あすこだ」

私は、涙を流し放題に流して、地じだんだをふまないばかりにせき立てて、震える手をのぼして妹の頭がちよっぴり水の上に浮うかんでいる方を指しました。

若い男は私の指す方を見定めていましたが、やがて手早く担つていたものを砂の上に卸し、帯をくるくると解いて、衣物を一緒にその上におくと、ざぶりと波を切つて海の中にはいつて行つてくれました。

私はぶるぶる震えて泣きながら、両手の指をそろえて口の中へ押しこんで、それをぎゅつと歯でかみしめながら、その男がどんな沖の方に遠ざかつて行くのを見送りました。私の足がどんな所に立っているのだから、寒いのだか、暑いのだか、すこしも私には分りません。手足があるのだかないのだかそれも分りませんでした。

抜手を切つて行く若者の頭も段々小さくなりまして、妹との距

たりが見る見る近よって行きました。若者の身のまわりには白い泡がきらきらと光つて、水を切った手が濡れたまま飛魚とびうおが飛ぶように海の上に現われたり隠れたりします。私はそんなことを一生懸命に見つめていました。

とうとう若者の頭と妹の頭とが一つになりました。私は思わず指を口の中から放して、声を立てながら水の中にはいつてゆきました。けれども二人がこつちに来るののおそいことおそいこと。私はまた何なんの訳もなく砂の方に飛び上りました。そしてまた海の中にはいつて行きました。如何どうしてもじつとして待っていることが出来ないのです。

妹の頭は幾度いくども水の中に沈みました。時には沈み切りに沈んだ

のかと思うほど長く現われて来ませんでした。若者も如何かすると水の上には見えなくなりました。そうかと思うと、ぽこんと跳ね上るように高く水の上に現われ出ました。何んだかきよくおよ曲泳ぎでもしているのではないかと思われるほどでした。それでもそんなことをしている中に、二人は段々岸近くなつて来て、とうとうその顔までがはつきり見える位になりました。が、そこいらは打寄せる波が崩れるところなので、二人はもろともに幾度も白い泡うずまきの渦巻の中に姿を隠しました。やがて若者は這うようにして波打際にたどりつきました。妹はそんな浅みに来ても若者におぶさりかかっていました。私は有頂天うちょうてんになつてそこまで飛んで行きましました。

飛んで行って見て驚いたのは若者の姿でした。せわしく深く氣息をついて、体はつかれ切ったようにゆるんでへたへたになっていました。妹は私が近づいたのを見ると夢中で飛んで来ましたがふつと思いかえしたように私をよけて砂山の方を向いて駆け出しました。その時私は妹が私を恨んでいるのだなと気がついて、それは無理のないことだと思うと、この上なく淋しい気持ちになりました。

それにしても友達の本は何所どこに行ってしまったのだろうと思つて、私は若者のそばに立ちながらあたりを見廻すと、遙かな砂山の所をお婆ばあさま様を助けながら駆け下りて来るのでした。妹は早くもそれを見付けてそっちに行こうとしているのだとわかりました。

それで私は少し安心して、若者の肩に手をかけて何かいおうとすると、若者はうるさそうに私の手を払いのけて、水の寄せたり引いたりする所に坐りこんだまま、いやな顔をして胸のあたりを撫でまわしています。私は何んだか言葉をかけるのさえためらわれて黙ったまま突立っていました。

「まああなたがこの子を助けて下さいましたんですね。お礼の申しようも御座んせん」

すぐそばで氣息せき切つてしみじみといわれるお婆様の声を私は聞きました。妹は頭からずぶ濡れになったままで泣きじやくりをしながらお婆様にぴったり抱かれていました。

私たち三人は濡れたままで、衣物やタオルを小脇に抱えてお婆

様と一緒に家の方に帰りました。若者はようやく立上つて体を拭いて行つてしまおうとするのをお婆様がたつて頼んだので、黙つたまま私たちのあとから跟いて来ました。

家に着くともう妹のために床がとつてありました。妹は寝衣に着かえて臥かしつけられると、まるで夢中になつてしまつて、熱を出して木の葉のようにふるえ始めました。お婆様は氣丈な方で甲斐々々しく世話をすますと、若者に向つて心の底からお礼をいわれました。若者は挨拶の言葉も得いわないような人で、唯黙つてうなずいてばかりいました。お婆様はようやくのことでの人の住っている所だけを聞き出すことが出来ました。若者は麦湯を飲みながら、妹の方を心配そうに見てお辞儀を二、三度して

帰って行ってしまいました。

「Mさんが駈けこんで来なすつて、お前たちのことをいいなすつた時には、私は眼がくらむようだったよ。おとうさんやお母さんから頼まれていて、お前たちが死にでもしたら、私は生きてはいられないから一緒に死ぬつもりであの砂山をお前、Mさんより早く駈け上りました。でもあの人を通り合せたお蔭かげで助かりはしたもののこわいことだったねえ、もうもう気をつけておくれでないとほんに困りますよ」

お婆様はやがてきつとなつて私を前にすえてこう仰おっしゃ有いましました。日頃ひごろはやさしいお婆様でしたが、その時の言葉には私は身も心もすくんでしまいました。少しの間あいだでも自分一人が助かりたい

と思った私は、心の中をそこら中から針でつかれるようでした。

私は泣くにも泣かれないでかたくなったままちんとお婆様の前に下を向いて坐りつづけていました。しんしんと暑い日が縁の向うの砂に照りつけていました。

若者の所へはお婆様が自分で御礼に行かれました。そして何か御礼の心でお婆様が持つて行かれたものをその人は何んといつても受取らなかつたそうです。

それから五、六年の間はその若者のいる所は知れていましたが、今は何処どこにどうしているのかわかりません。私たちのいいお婆様はもうこの世にはおいでになりません。私の友達のMは妙なことから人に殺されて死んでしまいました。妹と私ばかりが今でも生

き残っています。その時の話を妹にするたんびに、あの時ばかりは兄さんを心から恨めしく思ったと妹はいつでもいいいます。波が高まると妹の姿が見えなくなったその時の事を思うと、今でも私の胸は動悸どうきがして、空恐ろしいそら気持ちになります。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄 他四篇」岩波文庫、岩波書店

1988（昭和63）年12月16日改版第1刷

親本：「一房の葡萄」叢文閣

1922（大正11）年6月

初出：「婦人公論」

1921（大正10）年7月

入力：鈴木厚司

校正：地田尚

1999年9月27日公開

2005年11月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

溺れかけた兄妹

有島武郎

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>